

2022 年度 北九州市平和のまちミュージアム年報



目次

はじめに	館長 重信幸彦	1
------	---------	---

第一部 論考報告

「戦争体験の継承と“if”の可能性－広島市および北九州市の実践を事例として－」

学芸員 水谷桃子	3
----------	---

第二部 事業概要

I 施設概要及び沿革

1 設立理念	25
2 開館の背景	25
3 開館記念式典	25
4 施設概要	26
5 沿革	27

II 展示事業

1 常設展示	27
(1) 概要	
(2) 各展示ゾーン	
2 企画展示	29
(1) 開館記念企画展「原子爆弾と模擬爆弾“パンプキン”」	
(2) 「“軍都”北九州の歩みとその痕跡」	
(3) 「令和4年度 収蔵品展」	
(4) 北九州市制60周年記念企画展「北九州市ができるまで ～戦後復興の軌跡～」	

III 資料収集・保存事業

1 資料の収集状況	30
2 資料のデータ化	33

IV 映像・図書資料閲覧事業

V 教育普及事業

1 平和のまちスタディツアー	33
2 夏休み親子講座	36
3 長崎市との交流事業	36
(1) 青少年ピースフォーラム派遣事業	

(2) 長崎市平和派遣事業	
(3) 長崎～小倉 次世代交流平和推進事業	
(4) 長崎青少年ピースボランティア×北九州市学生による交流会	
4 映画上映と戦争体験をめぐる対談 Sharing War Experiences KITAKYUSHU 2022	40
5 戦跡ツアー	41
6 連携事業	42
(1) 文化資源調査隊活動支援(北九州市立大学)	
(2) 北九州市立大学文学部公開講座	
(3) 大学の講義・演習による利用への対応	
(4) JRウォーク(JR九州・小倉北区役所)	
(5) 原爆犠牲者慰霊平和祈念式典サテライト会場設営	
7 講演	44
(1) 北九州市立大学基盤教育センター特別講師	
(2) ESD協議会講演	
(3) ヒロシマ・ピースフォーラム講演	
(4) 未来へのとびらオンライン授業	
(5) 「十八の会」講演と平和のまちミュージアム見学	

VI 広報

1 本庁舎におけるパネル展示	47
2 ホームページ・SNS関係	47
(1) ホームページの運用	
(2) LINE・ツイッター(現 X)の活用	
(3) 学芸員日記	
(4) Wi-Fi の提供	
3 平和のまちミュージアム「LINE de スタンプラリー」の実施	47

VII 組織

1 管理運営(事務局)	48
2 北九州市平和のまちミュージアム運営懇話会	49
(1) 概要	
(2) 運営懇話会開催状況(第1回運営懇話会)	

第三部 参考資料

1 2022年度 統計データ	52
2 2022年度決算額	52
3 関係条例・規則	52

はじめに

館長 重信幸彦

本年報は、北九州市平和のまちミュージアム(以下、「当館」という。)の、2022年度、開館後1年間の事業の記録です。公表が、だいぶ遅れてしまったことを、お詫び申し上げます。

2022年度のことではありませんが、2023年6月に、当館の常設展示は、博物館展示に関する学術研究団体、日本展示学会の学会賞に選ばれました。テーマ設定や構成、映像音響機器の使用が優れており、「単に戦争被害を記憶する施設にとどまらない奥行き」ある展示であると評価していただきました。北九州という地域の暮らしの等身大の歴史のなかで戦争の時代をとらえるという展示コンセプトが伝わったのだと思っています。同賞受賞については、次号の「年報」で詳しく紹介する予定です。

この展示学会賞を受賞して、私たちは改めてそれまでに当館が展開してきた事業の意義を考えました。展示をつくりあげ、それを来館者に見ていただき、いくばくかの料金をいただく。そう考えるなら、展示は当館の「商品」ということになります。

それは当館にとってとても大切なのですが、開館以来、日々事業を推進している私たちとしては少し印象が違うのです。

当館は、開館後一年で、多様な実践を重ねてきました。そうした数々の事業との関りのなかでも、展示は重要な役割を果たしています。

2022年には、市内の小学6年生約7,300人を迎え入れた「平和のまちスタディツアー」により、当館を小学校の平和学習でどのように使っていただけるか、その可能性について、現場の先生方に具体的に知っていただく機会をつくりました。そして、小学生から大学生までを対象に、長崎への派遣を複数実施しましたが、その際、展示を活用して、事前研修を実施し、派遣をより深い学びへと導きました。

さらに、高等学校の「総合的探究」などを、当館を拠点に実施できるよう、現在も試行錯誤を重ねています。地域の暮らしの歴史として総力戦の時代を語る当館は、近現代史を学ぶ場としての可能性を持っています。その際にも、展示は重要な役割を果たします。

そうした展示は私たちにとって、「商品」というより、むしろこれから多様な実践を具体化していくための「資源」だといえます。私たちの使命は、この「資源」をさらに活用して、当館を、北九州における「平和への学びの拠点」として、創りあげていくことだと考えています。

その私たちの足跡を記して来し方を確認し、行く末を見据えるために「年報」を作成していきます。また、当館の学芸員を中心とするスタッフの思考の記録として、第一部の論考報告編を設けました。是非、ご一読ください。